

## ナイルの至宝、古代エジプト文明の遺跡を訪ねて②

(1月31日)

3日目はどんなところに行くのだろう。昨日の興奮が冷めやらない。小さなボートで西岸に渡って、まずハブ神殿(ラメセス3世葬祭殿)見学する。

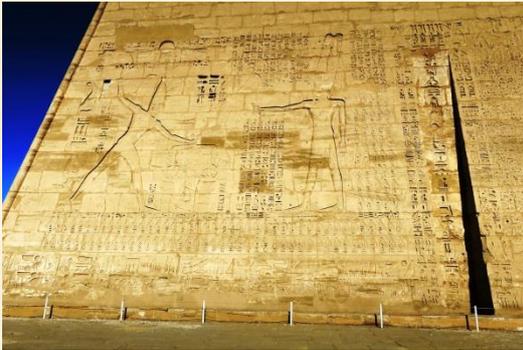
ここは、全体に非常に保存状態がよく、彫の深いレリーフや鮮やかな色彩が印象に残っている。入り口から、中に入るとライオンの頭のセクメト女神が見られた。



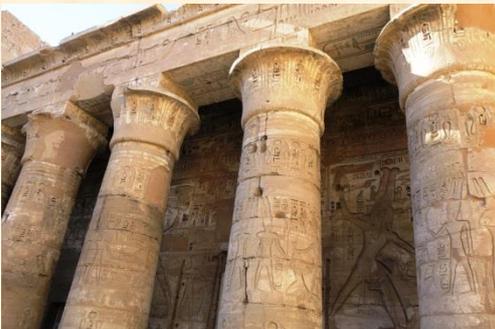
まっすぐに進んでいくと大きな塔門が現れる。

高さが22メートルもあるという。

左側には海の民を破ったラメセス3世の戦いのレリーフが彫られている。



また、サイド側には、狩りの様子が描かれている。塔門を抜け、第1の中庭、第2の中庭、列柱室へと進んで行く。中庭を取り囲む列柱や壁面には、レリーフが彫られている。第2中庭の四角形の柱には、ファラオが神々に供物を捧げているレリーフも見られた。また天井には綺麗な色彩の壁画が残っている。





列柱のホールには、切り株のような円柱の下部だけが残っていた。地震によるものとのガイドの説明もあったが、上部を誰かが持っていったのかもしれない。

は確か女楽士の絵があり、センネフェルでは、綺麗なブドウの木の装飾が見られた。ここは撮影禁止。

その後、貴族の墓へ向かう。まず泣き女が見られたラモーゼ、同じチケットであと2カ所見ることができた。ナクトで



昼食は確か魚介類の鍋料理。結構いける。いい雰囲気だった。食後は、ディル・エル・メディーナの職人の町へ。センネジェム、インヘルカウ、パシェドの墓を見学。美しい装飾で埋め尽くされていたのが印象に残っている。

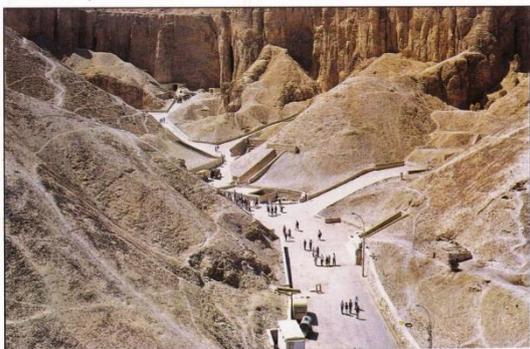
そうこうしているうちに夕方近くになった。急いでカルナク神殿へ。ここもすごく大きな複合神殿。中心はアメン・ラー神殿、大列柱室や、二本のオベリスク、狩りの場面や祭礼などのレリーフがしっかりと残っていた。



中王国時代のセンウセルト1世から、主として新王国時代のアメンヘテプ1世、トトメス1世、セティ1世、ラメセス2世など、そしてローマ支配の時代にわたって増改築され、歴代の王が増築部分を拡張していったという。

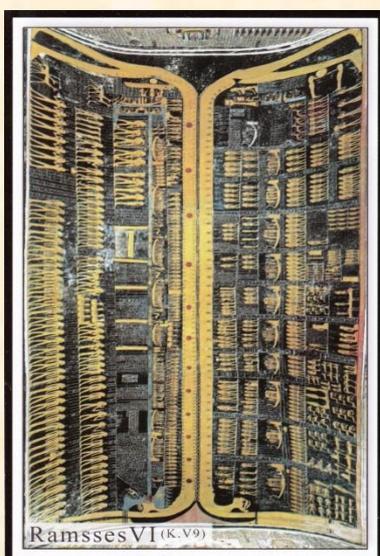


(2月1日)



4日目は、王家の谷に。ここは第18王朝トトメス1世から第20王朝ラメセス11世までが眠る。トトメス3世の墓ではとても繊細な線描画が見られ、ツタンカーメンお墓では、奥の部屋にミイラが安置されていた。

また、セティ2世の墓では美しいレリーフや色彩豊かな壁画が見られた。



そのほかラメセス6世の墓には、ヌウト女神の「昼の書」と「夜の書」が天上いっぱい描かれていた。日の出から日没(天空の女神ヌウトに飲みこまれる)までの太陽神の航海の様子と、飲みこまれた後どのように女神の体内を進み、生まれ出るかが描かれていて、興味深く見入っていた。

ここでは5カ所以上回ることができた。カメラは原則ため。そのため現地で購入したポストカードで一部紹介したい。

王家の谷全体 (ポストカード上) と「昼の書」「夜の書」 (ポストカード下)

その後王妃の谷へ向かう。ここでは目玉のネフェルタリのお墓、その色彩は3000年以上前とは思えないほど鮮やかだった。従来は見学できなかったようだが、今回公開されるということで素晴らしい遺跡を見ることができて大満足だった。



そして、その後はアラバスターと呼ばれる

(雪花石膏とも言われる) 石細工の工房に行った。様々な形をしたものがルクソールの特産品という。花瓶や小物石細工などが多く、多くのものが数多くなっていた。お土産にワイン用のグラスなどいくつか購入し、幾重に包装してもらった。けれども、帰宅して開けてみると一部割れているものがあり残念だった。手持ちで持って帰るべきだった。(反省)

夕刻には、ルクソール博物館を訪れた。ここでは、ルクソール周辺から発掘された多くの遺物が陳列されている。

収蔵品は、中王国からローマ帝国時代のものもあったが、新王国のものが多かった。アメンヘテプ3世の像やツタンカーメンの墓から発見された雌牛の頭像、ツタンカーメンの顔をしたスフィンクス像など数多くの貴重なものを見ることができた。今日も多くの遺跡や博物館を見学し、少し疲れたので帰ってビールを飲もう。ホテルではステラビールをいただいた。



明日は、カイロへ飛ぶ。ここで同行のお二人と合流することになっている。